『神奈川県立博物館研究報告（人文科学）』第四十六号　抜刷（二〇一九年十月）

【論文】

神奈川・松蔭寺所蔵銅造如来像（伝阿弥陀如来像）とその伝来

神野祐太

【論文】

神奈川・松蔭寺所蔵銅造如来像（伝阿弥陀如来像）とその伝来

神野祐太

【要旨】

神奈川県横浜市鶴見区に所在する松蔭寺には、銅造如来像（伝阿弥陀如来像）が伝わる。昭和二十二年（一九四七）にその存在が確認されてから当時の国立博物館に寄託されたが、伝来が不明であったこともあり評価は一定しなかった。

本稿では昭和二十二年当時の新聞記事や調査員の論考等により、本像の伝来について考察し、江戸時代後期には武蔵国橘樹郡の西寺尾八幡社に御神体として祀られており、明治初年の廃仏毀釈の影響を受けて別当寺である松蔭寺に安置されたとみられることを述べる。

また、作風を検討し飛鳥時代前期の止利様式と七世紀にもたらされた初唐様式を折衷した作風であると考察し、東京・深大寺釈迦如来倚像や千葉・龍角寺薬師如来坐像と比肩しうる作例であることを論じた。武蔵国以外からの移入の可能性も残るが、仮に現地付近での製作とすれば東国や武蔵国域の古代彫刻史上でも大変貴重な作例であることを再確認する。

【キーワード】

金銅仏、飛鳥時代後期（白鳳時代）、武蔵国橘樹郡、西寺尾八幡社、横浜市

はじめに

松蔭寺は神奈川県横浜市鶴見区に所在し、鎌倉時代後期に仏寿禅師によって開創された、臨済宗建長寺派に属する禅宗寺院である。同寺所蔵銅造如来像（伝阿弥陀如来像）はこれまでの日本彫刻史の先行研究においては、伝来が十分にわからないことから、製作年代や製作地について様々な見解が出され、評価が定まっていなかった。しかし、平成二十八年（二〇一六）に横浜市教育委員会による文化財調査[1]がおこなわれ、飛鳥時代の仏像として改めて評価され、同年十一月に横浜市指定有形文化財に指定された。筆者もその調査に参加し、『横浜の文化財―横浜市文化財総合調査概報―』に解説[2]を執筆した。本稿ではその解説で紹介しきれなかった昭和二十二年（一九四七）の所在確認当時の新聞記事や調査に携わった池谷健治氏の論考等の文献類を提示し、像の伝来等について考察したい。

一　如来坐像の概要

まず、如来像（図1～6）の基本的なデータを確認する。像高は二五・三㎝（八寸三分）で[3]、坐像で一尺六寸を測ることになるが、それが計画的なものかは検討の余地がある。正面を向き左足を上にして趺坐し、裳裾を台座前にたらす。肉髻をあらわし、螺髪を賽の目状に刻む。髪際一段と四段目以降の正面の螺髪は、各粒を丸く整える。螺髪は両側面の耳上半ばまでとし、後頭部は省略する。髪際は正面をやや湾曲させる。肉髻珠及び白毫相をあらわさず、耳垂部は不貫で平板状とする。三道相を刻む。衲衣・覆肩衣・裙を着ける。衲衣は左肩から右脇腹にまわり腹前を通って再び右肩にかかる。覆肩衣は両肩を覆い、右前膊にかかり、膝

横に垂れる。覆肩衣の端は衲衣にたくし込まない。裙の下端をみせ、正面中央で左前に打ち合わせる。身体部正面で膝を覆い左膝下にたくし込まれる一枚布の詳細は不明である（作者の服制への理解が及んでいない部分であろうか）。両臂を屈し、左は前膊を膝につけ掌を上にして第一、二指を軽く捻じる。右は前膊を膝からややうかせ掌を立て第一、二指を捻じ他指を伸ばす。

蠟型の銅製鋳造で頭頂から裳先まで一鋳とし、像内は外形に沿って空洞にする。中型土がわずかに残存する。頭頂部に鉄芯を抜いた穴がある。体部背面地付きから高一三・〇㎝に横長長方形の穴が貫通し、型持ち痕にかかわるものと推測される。像底背面部の左右に鋳造後のはつりがみられ、鋳造時の湯口を設けたと思われる。左手首先下、右足先端の先、右手首先下方にそれぞれ透き切れの穴がみられる。頭髪部を除き全面鍍金。

表面の鍍金が処々で剝落するのを除けば概ね保存状態は良好である。頭頂部中央にうめられた円形の異材が後補で、台座（高一三・五㎝、木製）は新補である。

二　伝来について

次に、本像の伝来について考察する。平成二十八年（二〇一六）の横浜市教育委員会による文化財調査以前には、伝来について触れた先行研究はほとんど見受けられない。ここでは、本像の所在確認にかかわる記事を掲載した地方新聞と郷土誌の中から見出された文献を提示し、本像の原所在について述べる。

松蔭寺において本像の所在が確認されたのは昭和二十二年（一九四七）におこなわれた横浜市資料調査会による寺院調査時である。その調査時とその後の様子が地元紙『神奈川新聞』同年七月二十八日付記事に取り上げられる。全文を左に掲げる。[4] 翻刻に際しては、旧字体を新字体に改め、旧仮名遣いはそのままとした。

〔見出し〕

帰化人の作か　国宝に指定を申請　松蔭寺から稀有の古仏像発見

〔本文〕

人里離れた横浜市鶴見区東寺尾の松蔭寺から、千数百年前の金銅造り弥勒菩薩像一体が発見され、関東で最古を争う奈良朝初期の名作として国立博物館で専らの話題となつている。郷土史の快ニュース

●○横浜市史料調査会委員の吉谷、石井、池谷の三氏はこのほど鶴見方面の寺社調査を行つていたが、はからずも松蔭寺の中から飛鳥様式の流れを汲む弥勒像を発見。顔の長さ一寸八分、坐高八寸五分、もかけの高さ二寸、全長一尺五分。顔は明治三十二年北多摩の深大寺床下から発見された銅造釈迦像（現在国宝）に瓜二つで、この像はもと隣村西寺尾八幡宮の御神体だつたものを明治初年の神仏分離の折松蔭寺に移管したことが判明。早速国立博物館に搬入して監査官野間清六、丸尾彰三郎両権威の鑑定を求めたところ、関東には珍しい奈良朝初期の傑作で、北多摩深大寺の釈迦像や千葉竜角寺のものなどと比肩するものであると断定。博物館に陳列の上、国宝の手続きをとることになつた。

●○松蔭寺は鎌倉建長寺三十世仏寿禅師の開創する古刹で、こうした名作が西来のものか関東で作られたものか、またどんな経路をたどつて、数奇な運命をこの寺に隠していたものかは全く不明だが、上代帰化人の高級文化をもったグループが関東に流れこみ、このグ

図１　如来坐像　全体正面　神奈川・松蔭寺

図２　如来坐像　全体左斜側面　神奈川・松蔭寺

図３　如来坐像　顔　神奈川・松蔭寺

図４　如来坐像　全体左側面　神奈川・松蔭寺

図５　如来坐像　全体背面　神奈川・松蔭寺

図６　如来坐像　像底　神奈川・松蔭寺

ループが作つた信仰上の芸術作品が、たまたま関東最古の仏像として残存したのではないかとの説が有力である。

●○これについて野間清六氏は次のように語つた。

「深大寺のものよりはやや時代はさがるかも知（ママ）れないが名作です。奈良時代初期のもので直ちに書類を作つて国宝に指定する積りです」（写真はその仏像）

尊名を「弥勒菩薩」としていることは誤りであるが、概ね事実を伝えていると思われる。この記事の補助的な役割を果たすのが、新聞記事にも名前が挙がる池谷健治氏の発表された「松蔭寺蔵金銅如来像について」である。郷土史研究雑誌の『郷土よこはま』に掲載された。該当箇所は左記の通り。

昭和二十二年横浜市史料調査会が発足して間もない同年七月十二日生麦、寺尾方面に第一回の調査を行い、適、東寺尾町松蔭寺より発見された銅製如来像を、吉谷華圃氏は白鳳期のものと主張されたが類例の乏しい資料のため、真疑（ママ）未定のまま九ヶ年の歳月を経た一昨年秋、国立博物館にて、ついに同時代の優作たる事が確定を見るに至った今日、これに関係した一員として往時を顧み、欣懐の念を禁じ得ない次第（ママママ）でる。

なお、古く寺に伝えられ風土記稿にも記されていたと見られる建武年間の古図も、最近東京にて発見され、郷土史家の間に鶴見を中心とする中世史の研究に大きい波紋を投じている際なので、同調査員の一人たりし石井光太郎氏のすすめるまま、ここに本仏像を紹介する意味で拙文を草する事とした。（中略）

発見当時現在、川上誠宗師の語るところによると、本像は古く西寺尾八幡の神体で、神仏分離の際、別当寺であつた関係で厨子料、十円がそえられ当寺の有に帰したものである。（後略）[5]

この二つの文献から、初めて所在が確認された当時の状況とそれ以前の伝来について詳しく知ることができる。

まずは江戸時代から明治時代の伝来について確認する。端的にいうならば、本像は近世まで松蔭寺からほど近い西寺尾八幡に御神体として祀られており、明治初年の廃仏毀釈の影響により、別当寺であった松蔭寺に厨子料十円とともに移されたことがわかる。池谷氏が指摘するように、江戸時代後期の地誌『新編武蔵風土記稿』巻之六十七、橘樹郡之十、八幡社条に本像とみられる左記の記述がある。

村の西寄にあり、此社も山の上なり本社宮作りにて一間四方、本地は阿弥陀の坐像銅にて造る長二尺許[6]、

ここにみえる銅造の阿弥陀如来坐像は長二尺ばかりとし、本像の総高と比べても倍近い数値であるが、『風土記稿』の作者は仏像の大きさを概数で記述する場合が少なからず見受けられ、当時据えられていた台座（現存せず）をも含めた大きさを記述したとすれば、この記述は本像に関するものとみてよい。『風土記稿』は、文化七年（一八一〇）から編纂が開始され、文政十一年（一八二八）の調査を終え、天保元年（一八三〇）に完成したことから、十九世紀初頭には武蔵国橘樹郡の西寺尾八幡社に所在したことがわかる。

西寺尾八幡社は、現在の横浜市神奈川区松見町に所在する八幡神社であり、祭神は応神天皇、創建年代は不明である。明治六年（一八七三）、西寺尾村の村社に列せられ、明治三十年にはこれまでの八幡大神（もしくは八幡大社）という名称を八幡神社に改めた。昭和三十六年九月社殿を瓦葺き流れ造りに改築し、現在に至る[7]。中世の鶴見や寺尾は、寿永二年（一一八三）二月二十七日に源頼朝が鶴岡八幡新宮若宮領として寄進した「武蔵国師岡保内大山郷[8]」が鶴見に比定され、また文安四年（一四四七）には鶴岡八幡宮領「寺尾郷之渋沢村[9]」の名がみえることから鶴岡八幡宮との関係がうかがわれることが何か関係があるかもしれない。

なお、池谷氏の記事中にふれられる、松蔭寺に旧蔵された「建武年間の古図」は武蔵国鶴見寺尾郷図[10]で現在神奈川県立金沢文庫の所蔵になる。同図は墨書によって建武元年（一三三四）五月十二日に作成されたことがわかるが、この地図中には松蔭寺や八幡神社は描かれておらず、同社の創建がどの時期まで遡りうるかはわからない。「八幡宮[11]」や二か所の「阿弥陀堂」墨書があるものの本像の原所在として比定するのは史料がないため困難である。

続いて本像の所在が確認された状況である。この調査は横浜市史の編纂のため組織された横浜市史料調査会によるもので、第一回目の調査を生麦、寺尾方面でおこなった。そこで松蔭寺を調査した際に本像が確認された。新聞記事に名前の挙がる調査委員三名は、吉谷華圃・石井光太郎・池谷健治である。いずれも横浜市文化財調査の先駆者たちで横浜の生き字引とみなされた人々である。調査日は七月十二日[12]で同月二十八日にはすでに国立博物館（東京国立博物館の前身）に持ち込まれ、当時の彫刻史研究の第一人者である野間清六や丸尾彰三郎（文部省国宝調査室調査官）の目に触れており、国宝保存法下での国宝指定の候補に挙がっていたことがわかる。本像の価値は所在が確認された当時より認められ

図７　釈迦如来倚像　東京・深大寺

ていたことがうかがえ、新聞記事を見る限り、指定される可能性は高かったように思えるが、この年には行われず、その後の文化財保護法下でも未指定のまま現在に至っている。[13] 行政による文化財指定は、前述の通り平成二十八年に横浜市によって指定されるのを待たねばならない。当時すでに数少ない東国の金銅仏として価値が認められた東京・深大寺釈迦如来倚像（図７）と千葉・竜角寺薬師如来坐像に比肩する像として意識されていたこともわかる。

七月二十八日以降、一度松蔭寺に戻されたらしく、八月二日に石井光太郎と池谷健治が国立博物館に搬入し、その模様は『サン写真新聞』昭和二十二年八月三日付の記事に詳しい。[14] 東京国立博物館の台帳には、搬入二日後の九月四日が寄託受入日となっている。また、いつの段階のものか不明ながら、本像の像内にラベルが貼られている。

彫刻区寄託
神奈川松蔭寺
第一〇四号
国宝阿弥陀如来坐像

このラベルには「国宝」という文字が見え、国宝指定されているという誤解を招くほどの評価を受けた彫像であったことが垣間見える。

一方、池谷氏の記事の中では発見後九年間位置づけが定まらなかった様子もうかがえる。「真疑（ママ）未定のまま九ヶ年の歳月を経た一昨年秋、国立博物館にて、ついに同時代の優作たる事が確定を見るに至った」と語るのは、昭和三十年（一九五五）に東京国立博物館で開催された日本金銅仏展に出品されたことを指すとみられる。管見の限りでは、初めて一般に公開された機会とみられ、この展覧会の図録『日本金銅仏図録』によれば製作年代を奈良時代前期とする。[15] 当時の東京国立博物館の奈良時代前期は現在の区分でいえば飛鳥時代後期である。[16]

製作年代に関する考察は次章でおこなうが、いずれにせよ、本像の伝来が江戸時代後期まで判明することは重要で、詳しくはわからないものの長く武蔵国橘樹郡に伝わったことは推測できよう。

三　製作年代について

製作年代に関する主な見解[17]は、飛鳥時代後期（白鳳時代）、奈良時代、平安時代と様々な見解があり一定しない。一方で、奈良時代や平安時代とする、どの説も飛鳥時代後期の仏像を模したものという見解は概ね一致する。なお、本稿では六六〇年代から七一〇年までを飛鳥時代後期（白鳳時代）とする。[18]

図９　同　顔

図８　如来立像（N153 号）東京国立博物館

図 11　薬師如来坐像　顔　千葉・龍角寺

図 10　釈迦如来倚像　顔　東京・深大寺

ここで、三つの点に着目して今一度本像の作風を検討する。

一点目は面貌表現である。低い肉髻、後頭部の湾曲する地髪部縁、平板な耳垂部、ほぼ平行に引かれた上下の瞼、細い目、人中、真一文字に結ばれた口等の形式上の特徴は、例えば、法隆寺献納宝物中の如来立像（N一五三号、図8・9）のような童顔童形像の一群と共通した表現がみられる。目の彫り方に注目すると、本像は瞼の縁に沿ってたがねで彫り、目の中央部分を残している。このような目の彫り方は、東京・深大寺釈迦如来倚像（図10）のような関東に伝来する金銅仏や、中央に眼を向けると、盗難に遭い現在も行方がわからない奈良・新薬師寺香薬師如来立像、奈良・小山廃寺跡出土の塼仏の頭部等にもみられる。人中と下唇の下にへこみをあらわすのは、飛鳥時代の金銅仏によくみられる表現で、法隆寺観音菩薩立像（夢違観音）、法隆寺献納宝物中の小金銅仏、深大寺像や千葉・龍角寺薬師如来坐像（図11）にみられ、塑像でも奈良・川原寺裏山遺跡出土の天部頭部にあらわされる。

二点目は着衣形式である。着衣形式が最も近い像として、法隆寺献納宝物中の飛鳥時代後期の銅造阿弥陀如来倚像及び両脇侍像（N一四四号、図12）及び銅造如来倚像（N一四八号、図13）が挙げられる。衲衣・覆肩衣・裙を着け、衲衣が右肩にかからない点、衲衣と裙の裾を台座に懸ける点が共通する。両像ともに覆肩衣を衲衣や裙にたくし込む点は異なる。本像の覆肩衣の端を他の衣にたくし込まない例は珍しい形式と言える。

三点目はプロポーションである。前膊が極端に短い点、掌や足の大きさが体の比率に比べて大きい点が見て取れる。この点は、奈良・法隆寺金堂釈迦如来坐像をはじめとする飛鳥時代前期の止利派の仏像によくみられる。前述した飛鳥時代後期の童顔童形の如来立像（N一五三号、図

図13　如来倚像（N148号）　東京国立博物館

図12　阿弥陀如来倚像及び両脇侍像（N144号）
東京国立博物館

14）とも共通する。しかし、肩幅が広い点や胸を張って腹の奥行をほとんど出さない姿は、七世紀後半の奈良・当麻寺塑造弥勒仏坐像（図15・16）や多くの塼仏や押出仏の如来像のような初唐様式の影響を受けたプロポーションに近い。金銅仏では、飛鳥時代後期の奈良・正暦寺伝薬師如来倚像、同桜本坊如来坐像のような肩をいからせたものが挙げられる。本像が奈良時代や平安時代とみなされていたのは、肩幅の広さやブロックを積み重ねたような体部等の特徴を、奈良時代末から平安時代初頭の木彫像との類似とみてのことであったと思われる。それらは初唐様式の特徴と考えたほうが自然である。胸の奥行と腹の奥行がほぼ同じ厚さなので、奈良末から平安初期の腹の奥行が深いプロポーションとは一線を画す。つまり、本像は飛鳥時代前期の様式と初唐様式との折衷的な造形とみられ、製作年代は飛鳥時代後期の七世紀後期頃と考えられる。

図14　如来立像（N153号）左側面　東京国立博物館

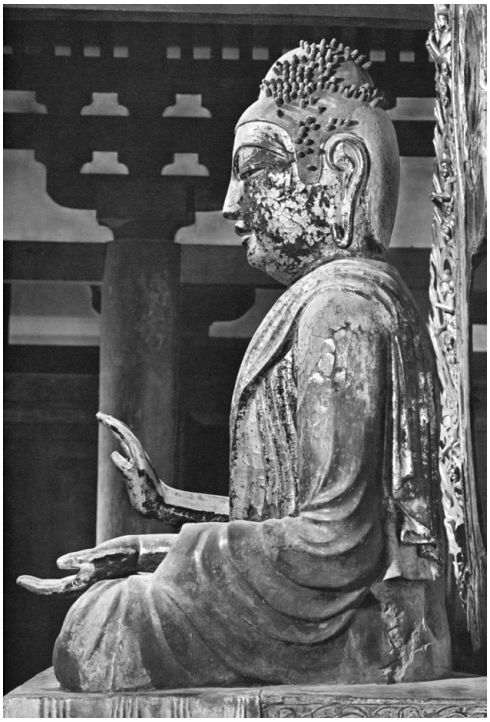

図16　同　左側面

図15　弥勒仏坐像　奈良・当麻寺

ほかにも衲衣で足裏半ばまで覆う点や衲衣や裙を垂下させる点は、飛鳥時代前期の雰囲気を残しながら、やや進んだ造形感覚が見受けられる部分として注意してよい。

四　印相について

最後に印相に注目する。本像の印相は両手とも第一・二指を捻じて他指をのばす、いわゆる来迎印に近い形をとる。ただ、指同士が触れ合う場所は若干異なり、左は指先が触れ合う程度、右は指先ではなく第二指の左側面に第一指の腹が触れる形である。

飛鳥時代に遡る阿弥陀如来像の多くは法隆寺金堂壁画六号壁の阿弥陀浄土図のように両手を胸前にあらわす転法輪印を結んでおり、押出仏や塼仏に作例がみられる[19]。転法輪印以外の印相で阿弥陀如来像とみられるのは法隆寺献納宝物中の阿弥陀如来及び両脇侍像（N一四四号）、法隆寺阿弥陀如来及び両脇侍像（伝橘夫人念持仏）等がある。これらは化仏をいただく観音菩薩像と水瓶をいただく勢至菩薩像が脇侍として配されていることから阿弥陀如来像と判明する。献納宝物像は左手は本像と同じく第一・二指をやや空間をあけてあわせるようにし、右手は全指を伸ばして施無畏印の形とする。伝橘夫人念持仏像は左手を第一、二、三指を伸ばし第四、五指を軽く捻じる刀印の形に近く、右手は掌をやや内側にむけて施無畏印とする。つまり、飛鳥時代の阿弥陀如来像の印相は転法輪印以外は、一定していなかったといえる。そのように考えるならば、本像の印相も阿弥陀如来特有の来迎印の初期的な例であるともいえなくもないが、現段階では作例数が少ないことや阿弥陀の来迎思想の需要の側面から不明と言わざるをえない。来迎印を結ぶ仏像は奈良時代の法隆寺伝法堂中の間阿弥陀如来坐像が古い例として知られ、平安時代前期になると四天王寺阿弥陀如来坐像や元興寺阿弥陀如来坐像が知られる[20]。ただ、両手の指の位置はこれらとは相違があり、来迎印を受容していく過渡期であることが想像される。献納宝物像（N一四四号）と左手の印相が近いことも指摘しておきたい。

いずれにせよこの印相が当初どのような意図をもって造られたのかはわからないものの、本像はいずれかの時期に来迎印を結ぶ阿弥陀如来像と認識され、西寺尾八幡社に祀られた。同社は八幡神を祭神とし、神仏習合の思想を背景に八幡神の本地仏として安置されたものとみられる。

おわりに

以上、松蔭寺所蔵の銅造如来像について考察した。伝来に関しては、江戸時代には武蔵国橘樹郡西寺尾八幡社（現、横浜市神奈川区松見町の八幡神社）に所在したことがわかった。当該地に古代から伝来した可能性も必ずしも否定できない。造形的にも関東を代表する作域であり、深大寺像や龍角寺像と同等の価値を有しており、神奈川県域の最古の仏像として大変貴重である。

古代の武蔵国橘樹郡では、近年の発掘調査により川崎市宮前区の影向寺周辺に橘樹郡家跡と古代寺院跡が存在したことが明らかになっている。郡家跡は七世紀末から九世紀までの役所遺跡で、影向寺周辺から七世紀末の白鳳様式の瓦が出土していることから、同寺の創建は飛鳥時代後期にまで遡ることが指摘される。このような郡家や古代寺院の存在は本像を考えるうえでも重要で、直接的な史料はないものの影向寺との関係を想像したくなる。もちろん、小型の金銅仏であるため移動が容易であることも十分考慮しなくてはならないことは言うまでもないが、その在地性を重視し、東国の古代史上に位置付けて考えることも選択肢のひ

とつとして残しておくべきではないだろうか。

註

（1）調査は寄託先である東京国立博物館において平成二十八年（二〇一六）八月一日におこなわれた。参加者は、山本勉、加島勝、萩原哉、荻野愛海、花澤明優美の各氏と筆者である。

（2）神野祐太「銅造如来坐像（伝阿弥陀如来像）」解説（『横浜の文化財―横浜市文化財総合調査概報―』二五、二〇一七年三月）。本稿の内容と一部重複する部分があることをお断りしておく。

（3）横浜市文化財調査時の山本勉氏作成調書を参照した。

法量の詳細は左記の通り（単位は㎝）。

総高（頭頂―裳懸先端）三三・八

髪際高　二一・六

頂―顎	八・九	面長	五・二	面幅	四・七
耳張	六・五	面奥	七・〇	胸奥（右）	七・二
腹奥	七・四	肘張	七・四	裾張	二〇・七
膝張	一六・九	坐奥	一二・一	像奥	一六・〇
膝高（右）	四・六	同（左）	四・九		

（4）『神奈川新聞』記事の存在は、武田周一郎氏のご教示による。

（5）『郷土よこはま』三、一九五七年七月。

（6）八幡社条の全文を左に掲げる。引用は『大日本地誌大系』三（雄山閣、一九五七年四月）による。

村の西寄にあり、此社も山の上なり本社宮作りにて一間四方、本地は阿弥陀の坐像銅にて造る長二尺許、拝殿は九尺に二間半前に鳥居を立つ、当社も勧請の年歴を伝へず、按に今東寺尾の松蔭寺に蔵する建武年中其寺の地形を図せしものに、八幡の社あるよしを載す、今も此寺当社の別当なれば、其所は古とも違ひぬれど何の頃にか此に移せしものならん、外には村内に八幡の社もなければ、恐くは建武の前より勧請ありし社ならん、されど此事別当寺に伝ふる所にもあらざれば今よりいかにとも定めがたし、土人云ふ往古は神輿ありしがやゝもすれば祟をなせしかは、村民をそれて山の麓に埋みたりと云、今其所を舎句子とて少祠を建てあり、舎句子と云はいかなる故なりや詳にせず、例祭は年毎に六月二十七日、

（7）八幡神社については、横浜市役所編『横浜市史稿』神社編（横浜市役所、一九三二年二月）、神奈川区誌編さん刊行実行委員会編『神奈川区誌』（神奈川区誌編さん刊行実行委員会、一九七七年十月）を参照。

（8）神奈川県企画調査部県史編集室編『神奈川県史　資料編一　古代・中世一』（神奈川県、一九七〇年三月）、四二二頁。

（9）神奈川県企画調査部県史編集室編『神奈川県史　資料編三　古代・中世三下』（神奈川県、一九七九年三月）、一六頁。

（10）武蔵国鶴見寺尾郷図については、高島緑雄「建武元年正統庵領鶴見寺尾郷図の研究―中世南武蔵の水田と水利―」（『明治大学人文科学研究所紀要』二五、一九八七年三月、のちに『関東中世水田の研究―絵図と地図にみる村落の歴史と景観―』〔日本経済評論社、一九九七年三月〕所収）等を参照した。

（11）黒田日出男「地域の歴史空間を歩く（下）」（『月刊百科』二八五、一九八六年七月）や註10の高島論文によれば、「八幡宮」の文字は擦り消された後に書かれていることから、当初のものではなく加筆された可能性が高いという。

（12）『サン写真新聞』四〇四号（一九四七年八月三日付）によれば、七月十日という。この記事の存在は、川上閑栖氏の御教示による。全文を左に掲げる。

〔見出し〕

鶴見に埋れていた国宝級の仏像

関東で三体目　奈良朝初期　帰化人の傑作

〔本文〕

二日の朝まだき　人もまばらな上野の森を　国立博物館へと急ぐ人二人

横浜市史料調査委員　石井光太郎　池谷健治の両氏で　大事そうにかかえた風ろ敷包みには小さな仏像一体が　ちん座ましましていた。

深大寺のと同形の金銅像

この仏像は　座高八寸五分　も掛けの高さ二寸五分　全長一尺一寸　腰から上は深大寺（都北多摩郡）のしやか像（明治二二年発見）と全く同形

博物館鑑査官野間清六　丸尾彰三郎両権威の鑑定により純然たる奈良朝初期（約千数百年前）の作で　帰化人の中　極めて高級な文化グループによる所産らしく　深大寺像より　やや時代は下るかも知れぬが　奈良朝時代のものとしては関東で　これが第三体目の発見　最古形式で　一　二位を競う優秀な金属　あみだ如来で　はかり知れぬ価値を持つ珍らしい尊像と

太鼓判を押された。

期待される学界への資料

これは去る七月一〇日　前期二氏が郷土史研究家　吉谷華圃氏と三人で横浜市鶴見区東寺尾町にある古寺　松陰（ママ）寺の本堂に　人知れずちりに埋もれて放置されていたのを　発見したもので　近く国宝に指定される。万一のことがあつてはと博物館搬入までは　努めて発表をひかえ一日夜陰に寺から搬出　二日早朝　ひそかに運んで来たというわけだが　この仏像の細部にわたる研究の結果は　学界に幾多の新資料を　もたらすものと期待されている。

〔キャプションその一〕

話題のあみだ如来像　もかけ（はかまの部分）が　奈良時代形式で　肩のいかつている点が　西国ものと違う特色といわれる

〔キャプションその二〕

仏像が発見された松陰（ママ）寺本堂　この中にある同寺本尊の後ろに　他の雑像とまざつていた

〔キャプションその三〕

搬入する発見者　池谷（右）　石井（左）両氏

(13)『朝日新聞（京浜版）』（一九五六年一月二十一日付）の記事によれば、昭和三十年（一九五五）に東京国立博物館で開催された「日本金銅仏展」によって、本像の製作年代が白鳳時代と決まり、指定の手続きが再度おこなわれようとしたことがうかがえる。この記事の存在は、川上閑栖氏の御教示による。左記に全文を掲げる。

なお、文中に重要美術品とあるが、昭和二十五年に文化財保護法が施行されていることから重要文化財の誤りである。

〔見出し〕

白鳳時代の逸品と分る

松蔭寺所蔵の仏像

九年かかって鑑定

〔本文〕

東京国立博物館の古代美術の権威者たちが、鑑定に九年もかかった珍しい金銅仏がこのほど、仏教渡来後数十年のものであり、しかも関東以北では最古のものとわかり、近く国の重要美術品指定の手続きがとられる。この仏像は横浜市鶴見区東寺尾町松蔭寺＝川上誠宗住職＝所蔵の座高二四・二センチメートル、総高三三・三センチメートルの釈迦如来座像。昭和二十二年七月、横浜市の郷土史研究家池谷健治氏らが松蔭寺で見つけ、白鳳（ほう）時代（奈良前期、千二百余年前）のものと主張したが、地元の研究家たちから相手にされず、博物館に持込んだ。同館でも年代推定などに九年間もかかり、昨秋、同館の野間清六、石田茂作、矢島恭介、千沢植治らの各氏が調査結果を持寄り、やっと白鳳時代の作で〝国宝級〟の逸品とわかった。鑑定にヒマ（ママ）どったわけは博物館の説明によると①藤原、鎌倉時代のニセモノではないかとの意見が一部にあった②法隆寺四十八たい（躰）仏など同時代のものと比較研究した③それぞれの部分がこの時代の特徴を備えているのだが、年代推定では意見がまちまちになっていた。などのためで、このころの金銅仏は畿内を除いて非常に少なく、関東以北ではこれをふくめて三ツ、しかも宗教的な気品をもった作品だという。地元で国の重美指定の手続を急いでいるが、この作者や経路はわからない。

博物館矢島考古課長の話　見せられたときはこんなに古いものがあったのか、とびっくりした。貴重なものなので私たちも慎重に調べ〝奈良時代前期の作〟とやっと意見が一致した。

〔キャプション〕

＝写真は白鳳時代の作と鑑定された仏像

(14) 註12の『サン写真新聞』記事参照。

(15) 東京国立博物館編『日本金銅仏図録』（東京国立博物館、一九五五年十月）。

(16) 註15の『日本金銅仏図録』による時代区分は、飛鳥時代を五五二年から六四五年まで、奈良時代を六四六年から七九三年と区分する。奈良時代を平城京遷都の七一〇年で区切ると、六四六年から七〇九年を奈良時代前期、七一〇年から七九三年を奈良時代後期とみなしていたとみられる。現在の東京国立博物館での時代区分は、飛鳥時代を五九三年から七一〇年、奈良時代を七一〇年から七九四年とする。

(17) 本像に触れた主な論考や解説は左記のとおり。

①『神奈川新聞』一九四七年七月二十八日付記事

②東京国立博物館編『日本金銅仏図録』（東京国立博物館、一九五五年十月）

③池谷健治「松蔭寺蔵金銅如来像について」（『郷土よこはま』三、一九五七年七月）

④五島美術館編『金銅仏展2』（五島美術館、一九七二年）

⑤田辺三郎助「阿弥陀如来坐像（神奈川・松蔭寺）」解説（松原三郎・田辺三郎助『小金銅仏』東京美術、一九七九年二月）、

⑥鷲塚泰光『金銅仏』（『日本の美術』二五一、至文堂、一九八七年四月）

⑦東京国立博物館編『特別展金銅仏―中国・朝鮮・日本―』図録（東京国立博物館、一九八七年三月）

⑧金子啓明「如来坐像」解説（東京国立博物館編『特別展図録金銅仏―中国・朝鮮・日本―』東京国立博物館、一九八八年三月）

⑨薄井和男「概説」（神奈川県立博物館編『神奈川の金銅仏』図録、神奈川県文化財協会、一九八八年十月）

⑩薄井和男・塩澤寛樹「銅造阿弥陀如来坐像」解説（神奈川県立博物館編『神奈川の金銅仏』図録、神奈川県文化財協会、一九八八年十月）

⑪鎌倉国宝館編『阿弥陀仏の世界』図録（鎌倉国宝館、一九九六年）

⑫林宏一「武蔵の仏像」（『国華』一四〇一、二〇一二年七月）

⑬岩佐光晴「薬師如来像」解説（平成十八年度～二十年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書『生身と霊験―宗教的意味を踏まえた仏像の基礎的調査研究―』東北大学大学院文学研究科東洋・日本美術史研究室、二〇一四年三月）、この文献の存在は原浩史氏よりご教示を受けた。

それぞれに示される製作年代は左記のとおり。

①奈良時代初期（野間清六談）、②奈良時代前期、③白鳳時代、④、⑤天平時代末～平安時代、⑥平安初期、⑦天平時代～平安時代　八世紀～九世紀、⑧天平時代　八世紀、⑨白鳳形式を踏襲する奈良時代最末頃、⑩奈良時代～平安時代　八世紀末から九世紀初め頃、⑪奈良時代、⑫八世紀、⑬七世紀後半

(18) 内藤栄「白鳳の美術」（奈良国立博物館編『白鳳―花ひらく仏教美術―』奈良国立博物館・読売新聞・NHKプラネット近畿、二〇一五年七月）。

(19) 阿弥陀の印相に関しては以下の論文を参照。泉武夫「十体阿弥陀像の成立」（『仏教芸術』一六五、一九八六年三月）、光森正士『阿弥陀如来像』（『日本の美術』二四一、至文堂、一九八六年六月）、藤岡穣「説法印阿弥陀如来像をめぐる試論」（『待兼山論叢　美学篇』三五、二〇〇五年）、鈴木雅子「来迎阿弥陀と滅罪についての一試論」（『フィロカリア』二六、二〇〇九年三月）。

(20) 註19の光森論文。

図版出典

図1～6　神奈川県立歴史博物館保管（井上久美子撮影）

図7・10　深大寺提供

図8・9・12～14　東京国立博物館（TNM Image Archives）提供

図11　奈良国立博物館編『白鳳―花ひらく仏教美術―』奈良国立博物館・読売新聞社・NHKプラネット近畿、二〇一五年

図15・16　柳澤孝・辻本米三郎・渡辺義雄『当麻寺』（『大和の古寺』二）、岩波書店、一九八二年

付記

本稿をなすにあたり、調査の御許可をいただいた松蔭寺住職川上敬之氏、調査の機会をあたえてくださった横浜市教育委員会、東京国立博物館西木政統氏のご高配を賜りました。松蔭寺川上閑栖氏には貴重なお話を伺うことができ、折に触れて清泉女子大学教授山本勉氏、神奈川県立歴史博物館館長薄井和男氏、同学芸員武田周一郎氏よりご教示を賜りました。末筆ながら記して感謝の意を表します。